ドールが著効したことなどからTourette症候群である可能性が強く示唆された。

7．麻痺性発作を呈した進行麻痺の2例

吉野美幸，斎藤幸一，石川裕子
中里道子，小松尚也，岡田真一
児玉和宏，佐藤甫夫　（千大）
高岸正光　（国立下総療養所）

抗生物質大量療法を行った進行麻痺の2例を報告した。

症例1は卒中様発作を呈し，画像上，右前頭側頭葉に脳梗塞様所見を認めたが，この病巣は縮小した。

症例2はてんかん様発作を呈し，発作時脳波で右前頭葉から両側側頭葉の3 Hzのpoly-spike waveを認めた。

8．アルツハイマー病の海馬における$GABA_A$の受容体の変化

水上勝義，鈴木利人，白石博康
（筑波大）

アルツハイマー病の剖検脳海馬を用いて，$GABA_A$受容体の変化について検討するため，$\alpha 1$と$\beta 2$／3サブユニットに対する免疫組織化学と$\beta 2$，$\beta 3$おのおののmRNAに対するin situ hybridizationを施行した。$\alpha 1$の染色性はアルツハイマー病の進行につれ高度に低下したが，$\beta 2$／3の染色性はよく保たれた。しかし$\beta 2$，$\beta 3$個々の検討では，$\beta 2$のmRNAは保たれていたが，$\beta 3$は著明に低下した。今回の検討から$GABA_A$受容体の各サブユニットはアルツハイマー病脳でそれぞれ異なる反応を示し，それらの変化が神経細胞の変性に関連する可能性が示唆された。

9．老年期痴呆疾患々者の任意入院について

鈴木秋津（社会精神医学研究所）

その入院同意の効力について考察する。すなわち，

(1)入院同意の定義，(2)入院同意の有効性の基礎，意思能力，(3)痴呆者の医療保護入院に関する利益衡量論的考察，(4)その問題点，(5)意思能力と入院を拒むことができる能力との関係，(6)意思能力の有無判定，(7)臨床像とテスト成績のギャップの精神病理その他等。

10．前脳内神経回路の発達と精神活動

川村光毅（慶應義塾大解剖学）

哺乳類の大脳皮質の形成過程で視床皮質線維および皮質視床線維を含む皮質遠心性線維は，各々が免疫グロブリン・スーパーファミリーに属する異なる接着因子をその軸索上に発現し，細胞外基質であるコンドロイチン硫酸ファミリーに属する特定のプロテオグリカンと相互関係を維持しつつ，走行路が決定される。また，転写調節因子も脳の形成に重要な役割を演じていることが，ある種の変異体（ミュータント）マウス／ラットの解析から明らかにされてきた。齧歯類変異体の大脳新皮質，旧皮質，扁桃体，視床下部などの領域に認められた形態異常の所見を示しながら，認識や情動の物質的基盤について考察してみたい。

11．癌患者に対する精神科医の関わりと問題点

藤田充明
（松戸市立福祉医療センター東松戸病院）

手術適応がない患者は，うつ症状を認めることが多いが，ほとんどの患者は正確な病名告知を望み，隠された場合の孤独感，疎外感を嫌う。家族が告知に拒否的な場合は，告知前に家族面接を行なって家族の思いに理解を示し，告知が結果的に患者の治療にプラスになることを説明した。余命告知後の，反応性の症状は見捨てられ感，孤独感からきているところが多い。精神科医としては，主治医との位置関係や患者の退行に注意が必要である。

12．三芳病院における「家族教室」の試み

渡辺啓治，宮城島大，竹田修志
斉藤由美，鈴木一基，宮田米子他14名
（三芳病院）

精神障害者のリハビリテーションの進展の一つとして，現在広まりつつある心理教育的家族教室の三芳病院における実践を紹介した。通院中の分裂病者の家族を対象とし，月に1回日曜日に全8回開催，午前は教育セッション，午後はグループセッションを行った。講義は各職種が内容により分担，グループはSSTの問題解決的技法を採用，計25家族，平均12.6家族が参加した。家族教室の意義は大きく，今後も別の形成で開催予定である。

13．精神療法はどう変わっていくのか
－アメリカでの最近の変化から－

佐々木一（佐々木病院）

精神療法の先進地，アメリカにおいて精神療法に起きつつある変化について報告した。

医療経済を巡る厳しい状況下で，精神療法は大きな制約を受けるようになった。時間とコストを節約するために短期精神療法，認知行動療法が主流となりつつある。それを代表する2つの新しい精神療法として，EMDRとDBTを紹介した。いずれも対象疾患と治療目標